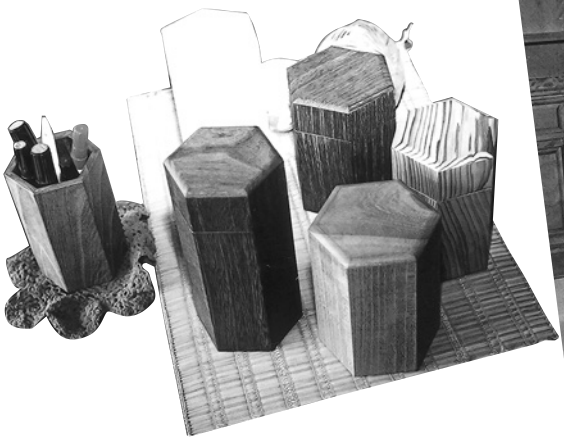
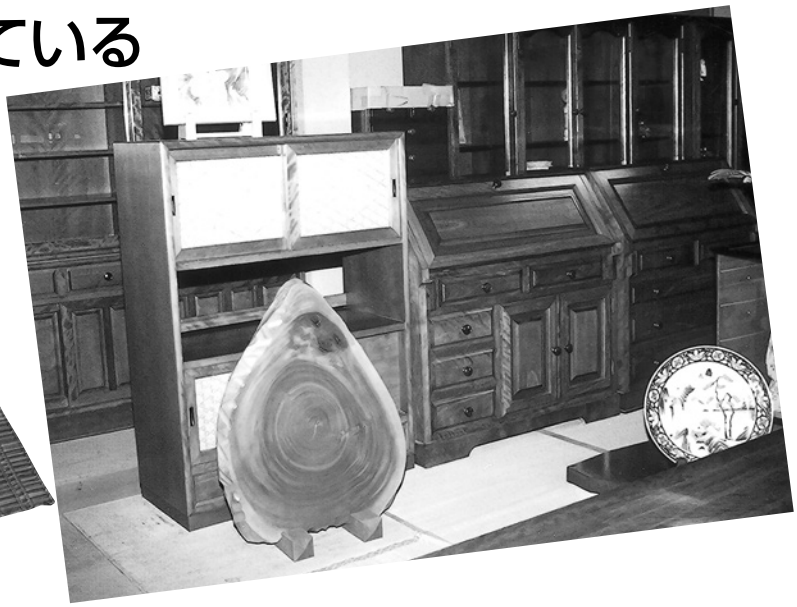
大正から昭和初期の技法を駆使して作られている家具揺籃期の趣を残している





夢追い人

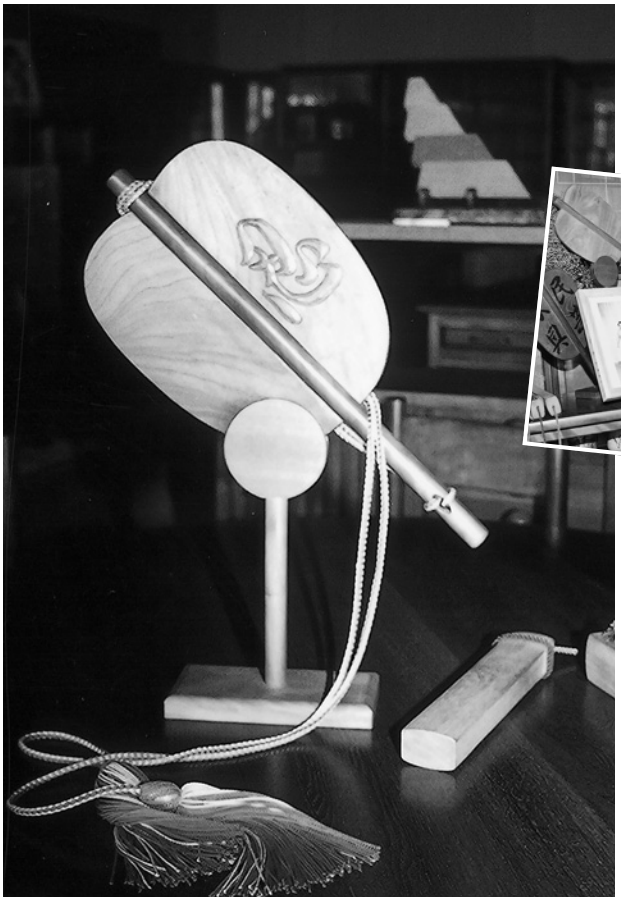
寿技工房　代表者　杉　芳　人さん

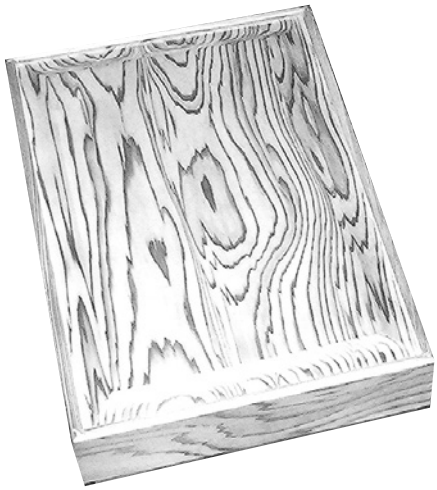
大川市中原324　TEL　0944(86)3131

しばしば大川家具は四百六十年の伝統を持つといわれるが、実際のところ昔ながらの伝統を今なお受け継いでいる木工所は片手で数えるくらいしかない。その中でも最も際立っているのが、寿技工房である。その家具のほとんどが手づくりで大正から昭和初期の技法を駆使して作られている。そしてそれらはおそらく大川家具揺籃期の趣を残しているのだろう。今回夢追い人で注目するのは、寿技工房の二代目、大正時代から家具造りに携わっている家具職人で、代表者の杉芳人さん。

本物の伝統家具

家具のほとんどが手づくりで そしてそれらはおそらく大川





杉さんは大川が自慢できる隠れた名工の一人。国技である相撲で使用する軍配は杉さんが製作している。それが縁で第二十九代式守伊之助とは親交が深かったという。

寿技工房で作られている、座机、書棚、茶棚、箪笥は、北海道産の楢、桜、キハダ、紫檀などが用いられている。確かにデザイン、色彩に華があるわけではない。しかし、よくよく見てみると、その質感の高さに圧倒される。高い技術力に裏打ちされた美しさがある。伝統の道具を使って、丁寧に時間をかけて作り上げられているのだ。もちろん有機溶剤を使った塗装はしない。表面の光沢や滑らかさ、木目の美しさは絶品である。

木材は全て自然乾燥である。二～五年を要する。こうして天日にさらして初めて長く使える材質になるそうだ。

杉さんは「何世代も受け継がれる家具を作り続けてきました。」と自負する。

杉さんの職人気質、その頑固さや一徹さには感服する。こんなエピソードがある。日本が高度経済成長期にあった三十五年前、ある経営コンサルタントが大川市にやってきて講演をしたことがあった。話の内容は経営の近代化は必要であり、機械化をしなければ時代に乗り遅れるといった内容であった。しかし、杉さんは講師にこう質問を投げかけたという。「私は今までの行き方を続けていこうと思う。私の持つ技能を生かして一品一品納得のいく製品を作っていく、これがわれわれ零細業者の行く道ではないですか。」

そして今日までその行き方を貫いた…。

製造工程の機械化に伴って大川産地独自の技能が失われた感のある今、杉さんの家具を見ていると、昔ながらの大川家具、技術のすばらしさを再認識させられる。単に希少価値という観点でなく、その製品の秀逸さに心引かれる。

最後にもう一つエピソードを紹介しよう。

寿技工房の製品を見回ったある訪問者は、「お宅の製品はいわゆる大川家具ではありませんね。」と感想を述べたそうだ。その時杉さん曰く、「うちの製品が本当の大川家具ですよ。よその製品が変わってしまっただけです。」